

小学校における鑑賞学習に関する現状と教員の意識

— 京都市立小学校教員対象の質問紙調査から —

竹内 晋平

(京都教育大学附属京都小学校)

The Present State of Art Appreciation in Elementary Schools and the Attitude of Teachers:
Based on a Questionnaire Survey Among Municipal Elementary School Teachers in Kyoto

Shimpei TAKEUCHI

2007年11月30日受理

抄録：鑑賞学習に対して積極性の高い小学校教員と低い小学校教員では、鑑賞学習のとらえ方や指導上の課題にどのような差異が現れるか、という点を明らかにするための質問紙調査を行った。その結果、鑑賞学習に対する考え方や課題は、およそ次のような傾向に集約される。低得点群は、鑑賞学習を指導した経験が少なく、鑑賞学習を狭義にとらえる傾向があり、鑑賞学習の方法がわからないことを課題として挙げている。高得点群は、鑑賞学習を様々な施設・対象で実践することに意欲的であり、鑑賞学習で育つ能力についても比較的広義にとらえようとしている。課題としては美術館の費用、図画工作科の時数の問題等、制度的な点を挙げている。これらの結果からは、教員の「構え」の違いによって鑑賞学習に関する課題に大きな差異が現れることが明らかとなった。

キーワード：鑑賞学習，図画工作，教員の意識，教員研修

I. 問題の所在

小学校における図画工作科指導は、新指導要領としてスタートした戦後から、特に表現に対して主眼がおかれ、時には「作品主義」「コンクール至上主義」といったことが批判されることも少なくなかった。そして、小学校現場で展開される鑑賞学習は児童の作品を相互に鑑賞したり、教科書の図版を使って鑑賞したりして終わることが多く、自由な感想に終始する、目標が曖昧な指導となったり指導者からの一方通行の指導となったりすることにとどまることが多かったと言える。1977（昭和52）年改訂の学習指導要領でも「鑑賞は表現に付随して行う」¹⁾との記述がなされ、鑑賞学習の位置付けは、表現に従属した形のままであり、図画工作科における指導の中心は依然として表現のままであった。その後、1980年代後半になり、学校教育関係者や美術教育研究者の間で鑑賞学習に関わる議論が活発になされるようになった。その要因の一つとして、1980年代にアメリカで起こったDBAE^{注1)}の運動の高まりによる影響を受けたことが挙げられる。これ以降、学校教育における鑑賞学習が、美術館関係者をも巻き込みながら議論され、効果的な実践が数多く行われるようになったのは周知の通りである。教育政策の面から見ても、「鑑賞」がより独立的に、より進歩的にとらえられていることは、その後の学習指導要領の変遷を見ても明らかである。この結果、様々な教育雑誌において鑑賞学習に関する記事が掲載されたり特集が組まれたりするようになった。また、2006年に開かれたある美術教育関係学会の研究発表のうち28%が鑑賞学習に関わるものだった、との報告²⁾もある。このような経緯をたどり、国公立・私立を問わず、多くの美術館において独自の教育普及活動の中で鑑賞学習を取り入れたり、学校と美術館との協働を進める中で、効果的な鑑賞学習の場を提供しようとする動きも決して珍しいことではなくなってきた。このように、鑑賞学習をめぐる環境が活況を呈することになったのは間違いないが、一方で小学校の教育現場において鑑賞学習に関わる理念が広く普及し、積極的に実践されているとは言えない現状があることも事実である。近年、市町村教育委員会が中心となって図画工作科研究グループが立ち上げられ、鑑賞学習に関わる教材開発・実践研究等が行われている事例^{注2)}もあるが、すべての教員にこのような学習の効果が共通理解されていないことも否定できない現状である。

この問題が発生する要因はいくつか考えられるが、その一つとして、小学校教員の中で図画工作科を専門としている教員の比率は、決して高いものとは言えず、さらに学校体制として図画工作を研究活動の対象としている小学校はごく僅かであることが挙げられる。このことは、教員自身が図画工作科における専門性の低さから、鑑賞学習を敬遠していることも予想させるものである。また、小学校教員は、図画工作科に限らず多くの教科等を指導する必要があるが、鑑賞学習だけに力点を置いた指導は現実的ではないことが挙げられる。さらに再燃しつつある昨今の学力低下論争³⁾の中で、単純に「読み・書き・算」を重視しがちな世論の中では、鑑賞学習の価値、さらには図画工作科そのものの価値が認められにくいことも現実である。

II. 鑑賞学習をめぐる課題を指摘した先行研究と本研究の位置づけ

小学校における鑑賞学習をめぐる課題を指摘した研究が複数の研究者によって報告されている。先駆的な調査報告としては、石川誠・石川千佳子・瀬戸知也（1999）が行った「学校と美術館との連携に関する調査」⁴⁾が挙げられる。この調査では、美術館と学校との連携についての教員に対する質問をおこなっている。鑑賞学習を展開する上で障害となっている点として明らかになっているのは、両施設間の距離的な隔たり、所要時間、学習にかかる費用の問題、そして鑑賞学習に必要な資料の入手や教材研究の難しさ等である。また近年、新関伸也（2004）が行った「小・中学校における鑑賞学習の実態と考察」⁵⁾では、鑑賞学習を進めるために必要な改善点として小学校教員は、教員の研修や指導時数の確保、そして鑑賞に関わる資料の充実等を多く回答していることが明らかとなっている。また、松村一樹（2004）による調査報告「鑑賞教育における地域の美術館利用に関する考察—京都市の小・中学校による美術館利用の実態調査をもとに—」⁶⁾においても同様の傾向が認められる。そして、大橋功（2003）は、「学校美術教育における「鑑賞教育」の課題についての一考察」⁷⁾において、教員の鑑賞学習の実践に対する消極性を教員対象のアンケート調査をもとにして指摘している。これら4つの報告からは、2点の共通する問題点が浮き彫りとなっている。

- (1) 多くの教員は、鑑賞学習に意義を感じているが、様々な課題から積極的な実践ができていない。
- (2) 鑑賞学習を実践する上で課題となっているのは、美術館等の不足（距離の問題）、教材研究の難しさ、多くの教員にとって未開発な実践方法・授業展開である。

上記4つの先行研究はすべて図画工作科担当教員に対する調査となっており、小学校教員の大多数を占めると考えられる、「図画工作科に対する専門性をもたない教員」の意識がどのようなものかは不明である。そこで、本研究においては、先行研究では言及されていない、教員の特性に起因する鑑賞学習に関する課題の差異について明らかにするための調査を進め、明らかとなった課題を解決できる実践を展開することとした。

III. 研究の目的と手続き

1. 研究の目的

先行研究の動向からは、学校において鑑賞学習を展開する上での課題として、「教員がもつ取組上の課題」が見えてくる。本稿では先行研究を踏まえ、さらに教員を鑑賞学習に対する積極性に関する高得点群と低得点群に分割した上で、それぞれの群がもつ鑑賞学習に関する課題の内容を比較・検討する。鑑賞学習に対して意欲が低い教員群は、鑑賞学習に関してどのような課題を感じているのか、また意欲が高い教員群にとって鑑賞学習を展開する上で障害となっているのは何かを明らかにすることをねらいとしている。

よって、本研究の目的は、次の2点である。

- (1) 先行的な報告で明らかとなっている点に加え、小学校現場の体制を踏まえながら鑑賞学習をめぐる現状と教員の意識を把握すること。
- (2) 鑑賞学習に対して積極性の高い教員群と低い教員群では、鑑賞学習のとらえ方にどのような差異が現れるかという点を明らかにすること。

筆者が(1)に関わって設定した質問は、これまでに鑑賞学習を行った対象や鑑賞学習に対する考え方等、合計5つである。2002年度より現行の小学校学習指導要領が完全実施され、6年目を迎える。鑑賞学習に関しては、

「地域の美術館などを利用」⁸⁾の記述がなされるなど、図画工作科での鑑賞のあり方が多様なものである、というところも明らかになった。つまり、学校と美術館との連携・協働の機会は、制度的には年々高まりつつある。そこで、小学校の教育現場において校外の施設を利用した鑑賞学習に関わる理念が広く普及し、積極的に実践されているかどうかを確認したいと考えた。また、鑑賞学習で育つと考えられる心情・能力については、批評力・美術への関心・観察力・コミュニケーション能力・表現活動への意欲、その他に派生的に形成される能力の存在も認められる。小学校の教員がこれらの能力をどのようにとらえているかということも明らかにしていきたい。

(2)に関して設定した質問は、小学校の教員がどの程度、鑑賞学習に対して積極性をもっているかを問うもので、合計6つである。この質問に対する回答を得点化し、回答者全体を「鑑賞学習に対する積極性に関する高得点群」と「鑑賞学習に対する積極性に関する低得点群」の2つの分類することとした。

分析においては(1)と(2)の結果をクロス集計し、小学校教員がもつ鑑賞学習に関する積極性の程度が、鑑賞学習の展開にどのような影響として現れているのかを、1つの傾向として明らかにしていきたい。

2. 調査の手続き

調査期間 : 2006(平成18)年7月22日～8月22日

調査方法 : 質問紙を使用し、郵送により実施

調査対象 : 京都市小学校教員(150名)

※ 行政区をブロックとし、1ブロックごとに5～15の小学校を無作為抽出する。1小学校あたり1～2名の教員を無作為抽出し、全体では150の調査対象者を設定した。無作為抽出のため、地域偏差および男女比以外の要素(図画工作科に対する専門性・年齢構成等)は考慮していない。

回収率 : 48.0%(72名)

3. 調査の内容

質問紙の内容は以下の通りである。

1) 鑑賞学習に対する考え方を問う質問(5質問・複数回答可)

- (1) これまでの鑑賞学習で利用したことがある施設・対象を挙げて下さい。
- (2) 今後の鑑賞学習で利用したいと思う施設・対象を挙げて下さい。
- (3) 鑑賞学習において育つと思われる心情・能力を挙げて下さい。
- (4) 鑑賞学習における問題点は何かと考えますか。
- (5) 鑑賞学習をめぐる環境の中でどんな条件を整えば、鑑賞学習の展開が容易になると考えますか。

2) 鑑賞学習に対する積極性を問う質問(6質問・4段階回答)

- (1) これまでの図画工作科の授業において、鑑賞学習をどれくらい実践してきましたか。
- (2) 今の児童は、鑑賞学習を必要としていると考えますか。
- (3) 鑑賞学習の方法をどの程度知っていますか。
- (4) 鑑賞学習の教育的効果を、表現活動と同じくらい重視していますか。
- (5) 今、貴校にある設備・教材で鑑賞学習を効果的に展開することは可能だと考えますか。
- (6) 今後、鑑賞学習を図画工作科の中で、実践していこうと考えますか。

4. 調査の結果

1) 鑑賞学習に対する考え方を問う質問に対する回答

前項で述べた通り、「鑑賞学習に対する積極性を問う質問」の系列では、回答を得点化して全体を「鑑賞学習に対する積極性に関する高得点群(以下、「高得点群」)」と「鑑賞学習に対する積極性に関する低得点群(以下、「低得点群」)」に分類する。「鑑賞学習に対する考え方を問う問題」の系列における集計では、「高得点群」と「低得点群」との比較を通じた分析を行う。まず、クロス集計を行う前に、この2系列を個別に分析したい。ここでは、そのうちの1系列である「鑑賞学習に対する積極性を問う質問」についての回答の集計結果を提示する。

(1) これまでの鑑賞学習で利用したことがある施設・対象を挙げて下さい。

集計結果(図1-1)からは、回答した教員の過半数が校外の施設を利用した鑑賞学習を行ったことがないことがわかった。鑑賞学習で利用した経験がある施設として、美術館と寺院・神社がほぼ同数であることは、京都市ならではの歴史的環境が大きく影響したものであると言える。鑑賞対象として3番目に多かった「その他」の具体的内容は、「校内作品展〔3〕」「博物館〔2〕」「画集〔1〕」「陶板名画の庭(京都市左京区)〔1〕」であった(〔 〕内は回答の実数を示している。以下同様)。この回答からは様々な制約の中で、教員が工夫しながら鑑賞学習を展開している様子が見えてくる。なお、「ギャラリー」「作家のアトリエ」「野外彫刻」「伝統工芸品の工房」を鑑賞対象とした経験がある教員は少数であった。

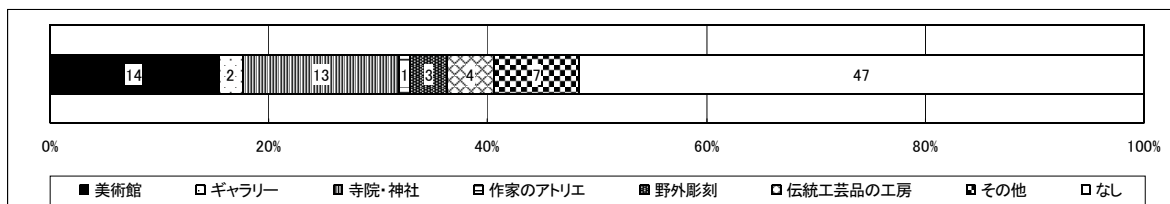


図1-1 鑑賞学習で利用したことがある施設・対象

(グラフ内の数値は回答の実数を示している。以下、すべてのグラフにおいて同様。)

(2) 今後の鑑賞学習で利用したいと思う施設・対象を挙げて下さい。

(1)の質問と比較して顕著であるのは、「(鑑賞学習で利用したい施設・対象は)なし」の回答が大幅に減少したことである(図1-2)。このことから、多くの教員は鑑賞学習を展開したいと考えているが、何らかの障害によって実行できないという現状を読み取ることができる。そしてその多く(約4割)の教員は美術館を鑑賞学習の対象として想定していることが明らかとなった。2番目に多かった回答は「寺院・神社」であり、前述の通り、京都市の特性が現れているものと思われる。「伝統工芸品の工房」「ギャラリー」「野外彫刻」「作家のアトリエ」にも一定の回答があったが、これらは選択肢によって鑑賞対象となり得ることに気付いた可能性も考えられる。「その他」の回答はなかった。

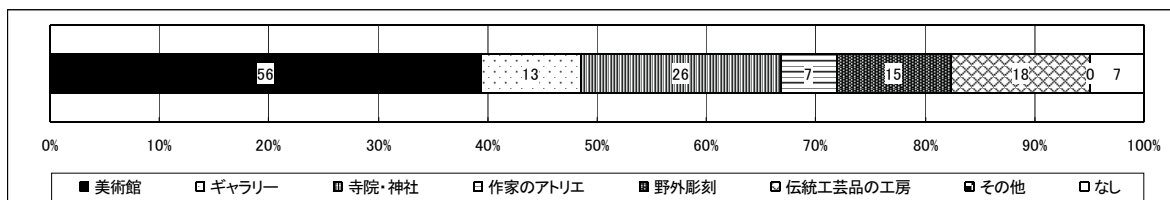


図1-2 鑑賞学習で利用を希望する施設・対象

(3) 鑑賞学習において育つと思われる心情・能力を挙げて下さい。

最も多かった回答は「美術への関心」であり、次いで多かったのが「表現力」であった(図1-3)。これらは、現行の学習指導要領に示されている、「表現および鑑賞の活動を通して、つくりだす喜びを味わうようにする」⁹⁾との記述に符合するものであり、予想されるべき結果となった。その他に多かった回答としては「観察力」が挙げられるが、一方で、「コミュニケーション能力」「思考力」「読解力」「情報分析能力」「自尊感情」を回答した教員は少数であった。「その他」の内容は、「向上心〔1〕」「美的直感力〔1〕」「生きる力、郷土愛、探求心〔1〕」「鑑賞マナー〔1〕」「感受性〔1〕」であった。

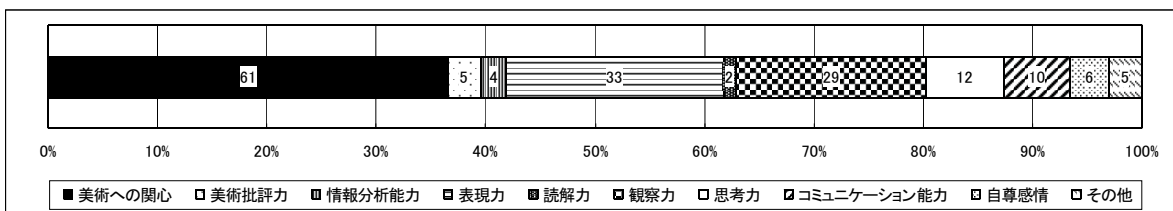


図1-3 鑑賞学習で育つと考える能力・心情

(4) 鑑賞学習における問題点は何だと考えますか。

教員が鑑賞学習を展開する上で、問題点だと考えていることを問うこの設問では、「美術館が近くにない」「鑑賞学習の方法がわからない」「評価の方法が難しい」「図画工作科の時間が少ない」との回答がほぼ同数であった(図1-4)。少数であったが「実践方法がわからない」「育つ能力がはっきりしない」の回答もあった。「その他」の内容は、「時間と費用の問題〔3〕」「(問題点は) 特になし〔1〕」「育成学級かつ1人学級なので実践には工夫が必要〔1〕」であった。

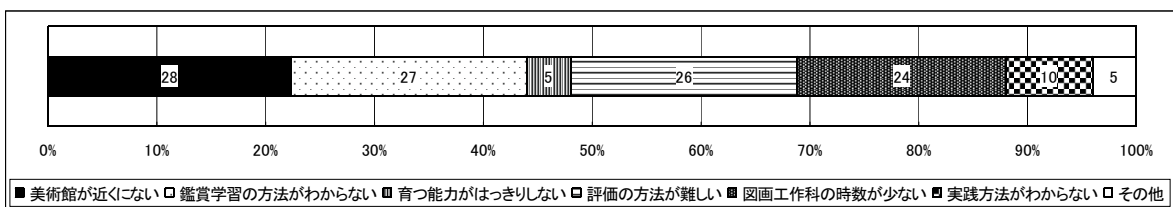


図1-4 鑑賞学習における課題

(5) 鑑賞学習をめぐる環境の中でどんな条件を整えば、鑑賞学習の展開が容易になると考えますか。

鑑賞学習をめぐる環境の中で必要な条件、換言すれば解決が期待される問題点を問う設問である。最も多かった回答が「鑑賞学習可能な施設の開発」であった(図1-5)。特に校区周辺に美術館等がない場合は、校外での鑑賞学習の展開が難しくなるので、この回答には教員の切実な希望が現れていると考えられる。次いで、「鑑賞学習の実践例の紹介」「美術館の無料化」「評価方法の明確化」が多く、少数であるが「図画工作科の時間の増加」「育つ能力の明確化」の回答もあった。「その他」の内容は、「美術館で児童向けの教室の開催〔1〕」「学校の現状が変わること〔1〕」「鑑賞施設のガイドブックの刊行〔1〕」「鑑賞の評価を廃止する〔1〕」「(鑑賞学習を) 学校行事に位置づけること〔1〕」であった。

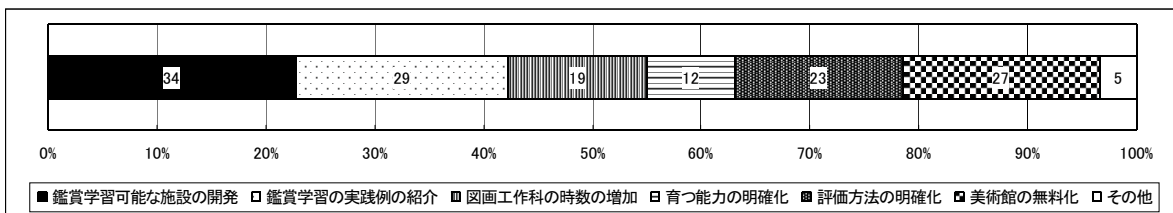


図1-5 鑑賞学習を容易に展開するための条件

2) 鑑賞学習に対する積極性を問う質問に対する回答

ここでは、先述の2系列のうちのもう1つの系列である「鑑賞学習に対する積極性を問う質問」に対する回答の集計結果を提示する。

(1) これまでの図画工作科の授業において、鑑賞学習をどれくらい実践してきましたか。

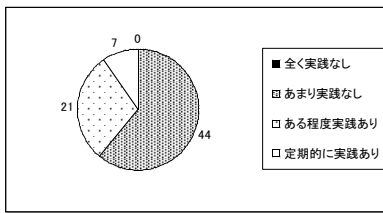


図2-1 鑑賞学習指導の実践経験

「全く実践なし〔0〕」と「あまり実践なし〔44〕」の合計が、「ある程度実践あり〔7〕」と「定期的実践あり〔7〕」の合計を大きく上回る結果となった(図2-1)。「全く実践なし」を1点、「定期的実践あり」を4点として得点化したところ、平均点は2.48点となった。

(2) 今の児童は、鑑賞学習を必要としていると考えますか。

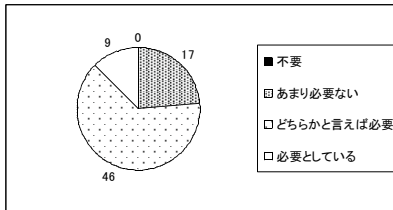


図2-2 教育現場における鑑賞学習の必要性

「必要としている〔9〕」と「どちらかと言えば必要〔46〕」合わせると、8割近くになった。「不要」との回答はなかった(図2-2)。前回と同様に得点化した平均は2.88点であり、6質問の中では最高点となった。

(3) 鑑賞学習の方法をどの程度知っていますか。

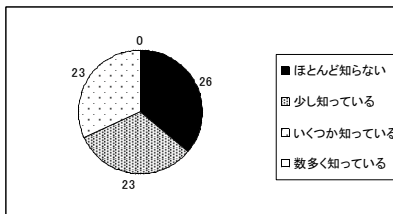


図2-3 既知の鑑賞学習法

「ほとんど知らない〔26〕」「少し知っている〔23〕」「いくつか知っている〔23〕」それぞれの回答がほぼ同数であった(図2-3)。「数多く知っている」の回答はなかった。平均点は1.95点となり、6質問中最低点となった。

(4) 鑑賞学習の教育的効果を、表現活動と同じくらい重視していますか。

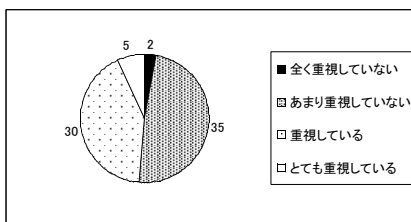


図2-4 鑑賞学習の重視度

「全く重視していない〔2〕」と「あまり重視していない〔35〕」という回答の合計と「重視している〔30〕」と「とても重視している〔5〕」という回答の合計がほぼ同数であった(図2-4)。平均点も2.52点と、中間点に近い結果となった。

(5) 今、貴校にある設備・教材で鑑賞学習を効果的に展開することは可能だと考えますか。

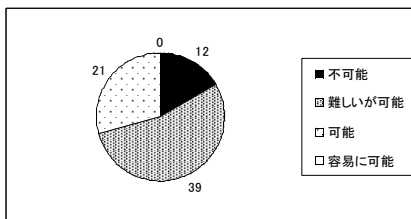
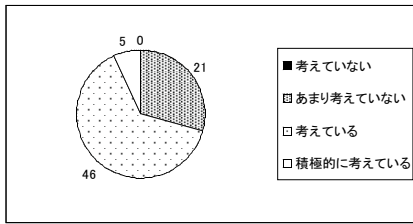


図2-5 勤務校における鑑賞学習の可能性

「不可能〔12〕」との回答もあるなど、全体的に鑑賞学習に対する困難さが回答に現れていると言える(図2-5)。「容易に可能〔0〕」という回答はなく、「難しいが可能〔39〕」との回答が過半数となった。平均点は2.12点となり、鑑賞学習に対してやや否定的な結果となった。

(6) 今後、鑑賞学習を図画工作科の中で、実践していこうと考えますか。



「考えていない [0]」の回答はなかった。しかし、「あまり考えていない [21]」という消極的な意見が3割にのぼった(図2-6)。残りの7割は「考えている [46]」「積極的に考えている [5]」という回答であった。平均点は、2.77点であった。

図 2-6 今後の鑑賞学習指導への積極性

以上、6つの質問に対する回答を得点化(6点-24点)して合計した結果、最高得点となった回答者は22点、最低得点となった回答者は11点であった。この得点を用いて回答者全体(72名)を「高得点群(34名)」と「低得点群(38名)」に分類した。分類する際の分岐点は、得点化の中間点である15点とし、15点以上の回答者を高得点群、14点以下の回答者を低得点群とすることとした。高得点群と低得点群の分類を用いて、1点目の系列の質問内容「鑑賞学習に対する考え方」に関してクロス分析を行った。その結果を次項で提示する。

3) 鑑賞学習に対する積極性と鑑賞学習に対する考え方に関するクロス分析結果

(1) これまでの鑑賞学習で利用したことがある施設・対象を挙げて下さい。

高得点群と低得点群とを比較して顕著に現れている差異は、「なし(校外での鑑賞学習経験)」の回答数であると言える(図3-1)。やはり低得点群の回答者は、鑑賞学習の頻度そのものが比較的少なくなる傾向がある。しかし、「ギャラリー」「作家のアトリエ」「野外彫刻」の頻度が少ないという点では、両者の間に大きな差異はなかった。

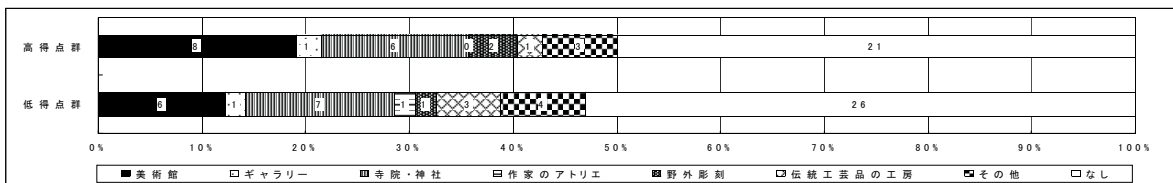


図 3-1 鑑賞学習で利用したことがある施設・対象

(2) 今後の鑑賞学習で利用したいと思う施設・対象を挙げて下さい。

(1)の質問と比較しながら分析すると明らかとなるのは、高得点群に比べ低得点群の回答者は、利用したい施設として「美術館」を多く回答している傾向があり、頻数としては半数近くにもものぼっている点である(図3-2)。この結果からは、低得点群の回答者は「これまでに美術館に行った経験は少ないが、鑑賞学習として行くなら美術館」というとらえ方をしているということを読み取ることができる。石川ら(1999)の指摘にもあるように、鑑賞学習を展開する上で障害となっている点として、学校と美術館との距離的な隔たり、移動に必要な所要時間、学習にかかる費用等の問題が存在する¹⁰⁾。それにも関わらず低得点群が「美術館」を比較的多く回答していることから、鑑賞学習の場として美術館のみを想定することが逆に「鑑賞学習を実践できない理由」となっている可能性が考えられる。小学校における業務の多忙とともに、小学校教員の鑑賞学習をめぐる意識の課題が浮かび上がってくると言える。

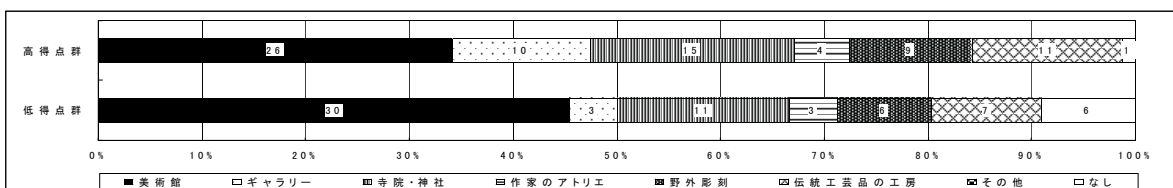


図 3-2 鑑賞学習で利用を希望する施設・対象

(3) 鑑賞学習において育つと思われる心情・能力を挙げて下さい。

高得点群も低得点群もどちらも「美術への関心」「表現力」「観察力」を多く回答する傾向があるが、「情報分析能力」「思考力」「自尊感情」等の、言わばこれまで鑑賞学習で育つ能力としては、派生的なものとしてとらえられてきた能力についての回答は、低得点群に比較して高得点群は2倍以上の頻数であった(図3-3)。サンプル母数が少数のため、有意の差と判断することは難しいが、教員がもつ意識の1つの傾向として読み取ることができると考えた。なお、「読解力」について回答があったのは、高得点群のみであった。

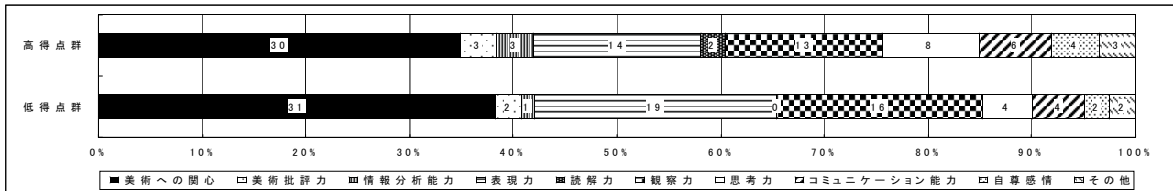


図3-3 鑑賞学習で育つと考える能力・心情

(4) 鑑賞学習における問題点は何だと考えますか。

この設問では、高得点群と低得点群の回答頻数に逆転がみられる項目があった。高得点群に比較して低得点群が「鑑賞方法がわからない」「実践方法がわからない」等、鑑賞学習の方法論に関わる問題点を回答した頻数は3倍近くにのぼる(図3-4)。逆に低得点群に比較して高得点群は「図画工作科の時間が少ない」という、小学校の体制・制度面での問題を2倍近くの頻数で回答している。両者の回答の集計結果からは、「やり方がわからないから鑑賞学習に取り組めない」あるいは、「時間がないから鑑賞学習に取り組めない」というそれぞれが問題としてとらえる質の差異を読み取ることができた。

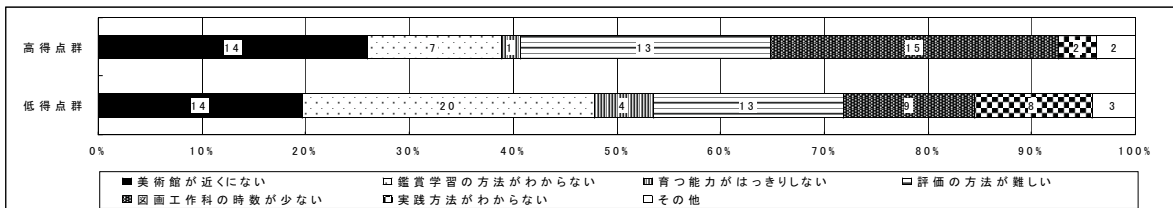


図3-4 鑑賞学習における課題

(5) 鑑賞学習をめぐる環境の中でどんな条件が整えば、鑑賞学習の展開が容易になると考えますか。

高得点群・低得点群、共に多かった回答は「鑑賞学習可能な施設の開発」であった(図3-5)。その理由として、京都市の場合、美術館は全体的に都心部に集中しているため、山間部や周辺部に立地し、美術館へのアクセスの面で不利な小学校は、美術館に訪問しての鑑賞学習の機会は、都市部に比較して少なくなるという地理的条件が存在するためであると考えられる。この傾向は、高得点群・低得点群の間にあまり差異はみられなかった。顕著な差異が現れた回答は「鑑賞学習の実践例の紹介」であり、低得点群の回答頻数は高得点群の約2倍となった。このことから、「鑑賞学習の方法を知りたい」という低得点群の教員のおもいは切実であると言える。

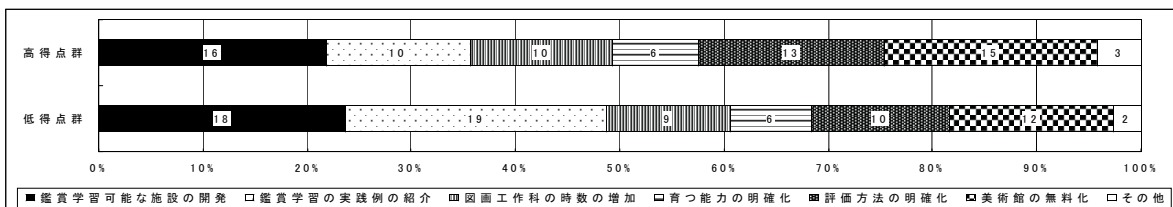


図3-5 鑑賞学習を容易に展開するための条件

IV. 考察

これまでに先行して報告された鑑賞学習に関する調査の多くが、サンプル属性を図画工作科担当者に限定しているものであった。そのため、小学校教員の大多数を占める図画工作科に専門性を有していない教員の実態は明確なものとなっていなかった。今回の調査におけるサンプル属性は、図画工作科に対する専門性を有する教員に限らず、完全に無作為な抽出を行っているため、より実態に近い形で小学校教員が抱える課題の全体像を明らかにすることができたと考えられる。(表1)は、低得点群・高得点群の回答に現れた、鑑賞学習に対する積極性に関する顕著な傾向をおおまかに集約して示したものである。

表1 鑑賞学習に対する積極性に関する得点群別の回答の傾向

回答者の分類	鑑賞学習指導の経験	想定する鑑賞対象	鑑賞学習で育つ能力	鑑賞学習における課題
高得点群	比較的多い	美術館以外にも多様な回答	比較的広義にとらえる傾向	図画工作科の指導時数 校外学習にかかる費用
低得点群	比較的少ない	美術館が多く その他は少数	比較的狭義にとらえる傾向	鑑賞方法がわからない 実践方法がわからない

鑑賞学習に対して意欲が低い教員群は、低得点群の教員は高得点群と比較して、鑑賞学習において、校外の施設を利用した経験が少ない傾向があることが明らかとなった。そして、低得点群の教員は高得点群と比較して、鑑賞学習で利用する校外の施設として、美術館以外の施設を想定しにくい傾向があった。このことは低得点群の教員が鑑賞学習の経験が比較的少ないにも関わらず、鑑賞学習の対象を美術館に限定して想定していることにより、かえって校外での鑑賞学習の実践を阻害してきていることを予想させるものである。このため、鑑賞学習が可能な施設は美術館に限らず数多く存在することを多くの教員に広く啓発していくことも、鑑賞学習をより普及させていく上で欠かせないことであると言える。また、低得点群の教員は、鑑賞学習における問題点として「鑑賞学習の方法を知らない」を多く回答していた。低得点群の教員がもっている、鑑賞学習の方法がわからないという課題は切実であり、このことがさらに鑑賞学習を敬遠するという悪循環になっていると考えられる。大多数の教員が「子どもが楽しく学習できるような指導を展開したい」と考えていることは想像に難しくなく、鑑賞学習を指導するに際して「中途半端な指導は避けたい」、「自信のないまま指導に踏み込めない」との考えに至ることも理解できる。しかし、教員の課題を追認するだけでは、鑑賞学習は現状のまま進展しない。

一方、多くの高得点群の教員は、「美術館の無料化」や「鑑賞学習の展開が可能な施設の開発」を望んでいることがわかった。「美術館の無料化」の回答については、近年の閉塞的な経済状況から、学校現場ではなるべく保護者の経済的負担は軽減したいという考えが理由だと思われる。しかし、美術館をはじめとする公共的機関も財政難から閉館や民間委託に追い込まれるケースもある等¹¹⁾、学校・美術館双方に楽観できない経済状況がある。存続している美術館でも法人化・独立採算化が進められている現状があり、常に収支を意識した運営とならざるを得ないと考えられるため、「学校団体は一律無料」ということは現実的には難しいと思われる。「鑑賞学習の展開が可能な施設の開発」に関しては、学校と民間のギャラリーが協働した鑑賞学習を展開することで児童の学習効果を高めることができると指摘した論考¹²⁾もあり、指導者の創意工夫によって地域の実情に合致した鑑賞学習を展開することで解決を図ることができると考えられる。

V. 結論

前章までに述べたように、本研究においては、高得点群・低得点群がもつ鑑賞学習に関する課題の内容を比

較・検討してきた。その結果、教員がもつ学習に対する積極性、つまり「構え」の違いによって鑑賞学習を展開する上で障害となっている課題には差異があることを明らかにすることができた。低得点群がもつ課題は、主に鑑賞学習の方法論に関わる問題であり、高得点群がもつ課題は、主に時間・費用等の物理的な問題であった。そして、鑑賞学習を展開する上での課題がある故に、さらに鑑賞学習に対する積極性が低くなるという悪循環が生成していることも調査の結果からうかがい知ることができた。学校教育をめぐる物理的問題、そして教員の意識がもつ課題が鑑賞学習を敬遠する理由になってはならない。今後、学校教育において鑑賞学習を望ましい形で普及させるためには、教員自身の積極的な教材研究と自己研鑽が求められることはもとより、美術教育関係者は鑑賞学習の「あるべき姿」を広く啓発し、行政は教員を支援するシステムを整備することが必要である。具体的には、教員養成機関や教育行政機関において、鑑賞を含む図画工作科指導法研修を制度化した上で定期的実施されることが期待される。また、実践研究の面においては鑑賞学習で育つ能力を明らかにするための取組を進め、その成果を学校現場に広く発信することが急務であると考えられる。

注

注1) Discipline Based Art Education の略で、1980年代からアメリカ合衆国で進められている美術教育実践。

「美学」「美術批評」「美術史」「制作」の4つの Discipline (学問) から構成されている。従来の美術教育に比べて鑑賞を重視していると言われている。

注2) 京都市教育委員会教育改革パイオニア実践研究事業(図画工作科)等が挙げられる。

引用文献

- 1) 文部省『小学校指導書 図画工作編』13版, 日本文教出版, 1985年(初版1978年), p.133
- 2) 上野行一「なぜ子どもに美術鑑賞が必要なのか」『美育文化』2006年9月号(56巻第5号), 美育文化協会, 2006年, p.13
- 3) 市川伸一『学力低下論争』, 筑摩書房, 2002年, 東京, p.7
- 4) 石川誠・石川千佳子・瀬戸知也「学校と美術館との連携に関する調査—学校における図画工作・美術科教科担当者向け質問紙—」, 宮崎大学教育文化学部美術科教育研究室, 1999年.
- 5) 新関伸也「小・中学校における鑑賞学習の実態と考察」『大学美術教育学会誌』, 第37号, 大学美術教育学会, 2005年.
- 6) 松村一樹「鑑賞教育における地域の美術館利用に関する考察—京都市の小・中学校による美術館利用の実態調査をもとに—」(京都教育大学教育学研究科修士論文, 未公刊), 2004年.
- 7) 大橋功「学校美術教育における「鑑賞教育」の課題についての—考察」『佛教大学教育学部学会紀要』第2号, 佛教大学教育学部学会, 2003年.
- 8) 文部省『小学校学習指導要領解説 図画工作編』, 日本文教出版, 1999年, p.4
- 9) 文部省, 前掲, p.6
- 10) 石川誠「学校と美術館の連携に関する考察II」『大学美術教育学会誌』33号, 大学美術教育学会, 2000年, p.50
- 11) 岡本康明「個としての美術鑑賞をめざして—宇都宮美術館の模索—」『2004 美術科教育学会第7回西地区研究会〈シンポジウム in 京都〉概要集 これからの美術教育—美術を身近なものにするために, 学校と美術館がいま, できること—』鑑賞教育研究プロジェクト(平成15—17年度科学研究費補助金(基盤C)研究プロジェクト 課題番号15530585)(代表者:石川誠), 2004年, 京都, p.39
- 12) 竹内晋平「学校と鑑賞教育の展開が可能な施設との連携に関する—考察—表現と鑑賞を関連させた授業の実践から—」『大学美術教育学会誌』第38号, 大学美術教育学会, 2006年, p.255